説教余滴

二つの映画

初めて観た映画は、練馬の豊玉小学校の校庭に張られたスクリーンに映された美空ひばりさんの作品だった、と記憶します。スクリーンが風にはためくと画面の俳優たちもおかしな顔になりました。映画の中身は全く覚えていません。あの頃は、野外映画会が良く開催されたようです。大勢の大人たちが集まり、悲喜こもごも、感情を顕にしていたようです。

12 歳ごろ、父に言われて、兄と一緒に観に行った映画があります。チャールス・チャップリンの名作≪ライムライト≫です。ぎっしり満員の池袋・日勝館、席があってよかった、と感じました。1952 年製作のアメリカ映画。チャールズ・チャップリン監督。上映時間 137 分。日本では 1953 年に公開。1973 年にリバイバル上映された。 チャップリンが長編映画で初めて素顔を出した作品で、同時にアメリカでの最後の作品となりました。この名作、私の脳裏にはカラー映画で記憶されていました。

この 20 年ほどの間に何回か繰り返して観たのは、デンマーク映画≪バベットの晩餐会≫です。1987 年に公開され、同年度のアカデミー賞最優秀外国語映画賞に選ばれました。その後も評価は高まり、1989 年の英国映画テレビ芸術アカデミー賞、最優秀外国語映画賞など、世界各国の映画賞を得ています。内容紹介は指数の関係上省略。残念です。宗教的な映画です。

私の友人がカセットテープにコピーして、贈ってくれました。何回見ても見尽くすことがありません。見るたびに気付きがあり、新発見があります。最近の発見、カラー映画だった。デンマークの風景、晩餐のメニューの品々、讃美歌を歌う場面。とても明るくきれいな色で描かれています。ところが、これまで私の記憶ではモノトーンだったのです。

カラー映画を白黒として記憶する。どういう意味があるのでしょうか。